

脊振山地の民俗誌(2)

- 山のくらしとその変遷・信仰と祭礼行事を中心に -

永野 真歩¹, 藤永 豪²

Ethnography in Folklore of Sefuri Mountains: Part 2 - Life World of Mountainous Area and Its Change; Popular Beliefs and Folk Ceremonies -

Maho NAGANO, Go FUJINAGA

要 旨

本稿は、佐賀県旧神埼郡脊振村鳥羽院下地区を主な対象として、高度経済成長期をはさんでの山村のくらしとその変容について、その聞き書きをまとめ、記録することを目的としている。前稿(永野・藤永 2010)では、定住の場としての「ムラ」と、生業活動を展開してきた生産・採集の場としての耕作・山林・河川域について報告した。今回の第2報では、鳥羽院下地区に継承されてきた各種信仰と祭礼行事を中心に、同地区の儀礼域とその変化について述べる。

I はじめに

本稿の目的は、高度経済成長期前後を基軸に、山間のムラのくらしとその変容について、その記録をまとめることにある。調査対象集落は、佐賀県旧神埼郡脊振村(現神埼市脊振町)鳥羽院下地区である(図1)。同地区は、脊振山地の標高300~400mに位置する中山間地域であり、佐賀市や福岡市まで車で60分以内の距離にある。周辺の都市部への近接性の高さから、1970年代より恒常的な農外就業者が増加し、兼業化が進行した典型的な都市近郊山村である(藤永2000)。近年では、過疎化、高齢化の傾向が著しい。

第1報では、定住の場としての「ムラ」と、生産・採集の場としての耕作・山林・河川域にお

ける住民の生業活動を中心に報告した(永野・藤永 2010)。今回の第2報では、鳥羽院下地区における1950年代頃の各種信仰や祭礼行事を中心とした儀礼域と、1970年代以降の兼業化と人口流出が進む中でのその変化について報告する。

現地調査は、主に1998年3月から1999年2月まで、および2008年10月から2009年1月にかけて実施した。なお、同地区の調査を開始した1998年の8月時点の人口は97、世帯数は26戸であったが、2009年1月現在、人口は78、世帯数は23戸となっている。

II 鳥羽院下地区における儀礼域

本稿では、松崎(1983)を参考に、神社や寺院、小祠、墓地等とこれらに関わる信仰の場によって

1 郵便局株式会社

2 佐賀大学 文化教育学部 地域・生活文化講座

構成される空間を儀礼域として位置付ける。図2に、1950年代頃の鳥羽院下地区における儀礼域を示した。前稿で述べたように、鳥羽院下地区は、古釜、大畑、松平、佐古の4小集落から構成され(図1)、各種信仰や祭礼に関する活動は、この小集落単位で行われることも多い。

1. 後鳥羽神社

後鳥羽神社は古釜の北に位置している(図2、写真1)。鳥羽院には、承久の乱により隠岐の島に流された後鳥羽上皇がひそかにこの地に逃れ、教信寺(現善信寺)を仮の宮とし、この地で生涯を終えたという伝承が残っている。この伝承が鳥羽院という集落名の由来とされている。後鳥羽上皇を主祭神としたのが、後鳥羽神社である。後鳥羽神社は、鳥羽院下地区および隣接する鳥羽院上地区の鎮守であり、現在も地域住民によって大切に管理され、様々な祭礼が行われている。



写真1 後鳥羽神社 (2010年5月 藤永撮影)

2. 塚

言い伝えによれば、後鳥羽上皇の亡骸は、教信寺の背後の山上に一旦葬られ、その後、山腹に移されたといわれる。その場所が、現在の林道鳥羽院線を挟んで、後鳥羽神社の南側に位置する小丘で、住民たちからは「塚」と呼ばれている(図2、写真2・3)。塚の周囲は、もともと水田として利用されていたが、2001年に「ふるさと創生事業」の一環として、「鳥羽院ふるさと自然公園」が造成された(写真4)。公園完成の2~3年前



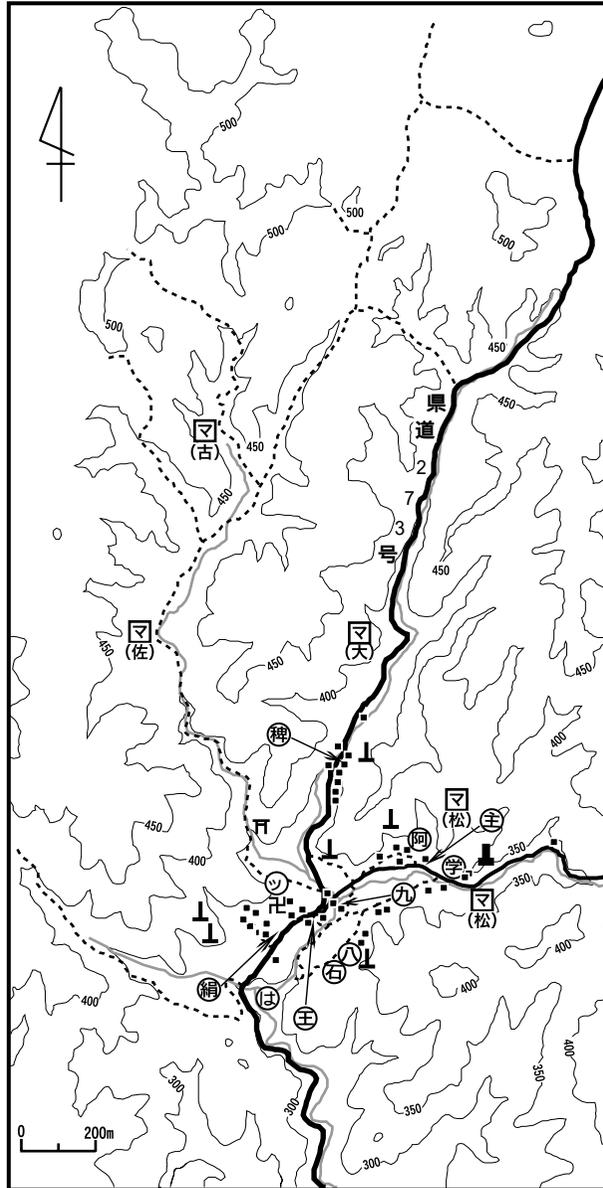
写真2 塚 (1998年8月 藤永撮影)
現在でも清掃・草刈りなど、住民によって大切に維持・管理されている。



写真3 佐古方面から塚を望む
(2009年11月 藤永撮影)
写真左手の円が塚付近を指し、右手の円の木立の背後に後鳥羽神社がある。



写真4 鳥羽院ふるさと自然公園
(2009年1月 永野撮影)
写真左手奥に展望デッキが見える。



■ 家屋 ④ 脊振村立脊振小学校鳥羽院分校

卍 後鳥羽神社 卍 善信寺 塚 ㊦

- | | | |
|------------|-------------|------------|
| ⑧ 絹巻きの観音サン | ⑥ 稗かゆのお地藏サン | ④ 松平の阿弥陀サン |
| ⑧ 八手の観音サン | ⑤ 地王サン | ⑤ 主観音 |
| ⑧ 石碑 | ④ ハヤマサン | ⌄ 墓地 |
| | | ⌄ 共同墓地 |

マツリダ (古) 古釜 (松) 松平
 ()内は管理している小集落 (佐) 佐古 (大) 大畑

——— } 道路 ——— 河川 ——— 等高線

図2 1950年代頃の儀礼域 (聞き取りおよび現地調査により作成)

から桜の植樹が進められ、現在では、鳥羽院下地区を見渡せる展望デッキや公衆トイレが設置されている。時には、後鳥羽上皇の足跡をたどって観光客が訪れることもある。

3. 善信寺

鳥羽院下地区には、浄土真宗の善信寺が立地し、鳥羽院下地区の住民をはじめ近隣の集落に多くの門徒を有している(図2, 写真5)。もともとは、教信寺と称し、天台宗の寺院であった。伝承によると、この寺は、後鳥羽上皇が鳥羽院に流れてくる際の従臣の流れをくむとされている。

2009年現在、鳥羽院下地区では16世帯が門徒となっている。また、善信寺は、旧脊振村、旧三瀬村、旧富士町の24カ寺からなる北山組(きたやまそ)¹⁾の構成寺院である。他の世帯は、旧神埼郡の各寺院の門徒であり²⁾、神埼組(かんざきそ)に属している。ただし、後述するように、善信寺の門徒ではない鳥羽院下地区の住民も、善信寺に関する諸活動に参加するなど、同寺は、後鳥羽神社とともに、鳥羽院下地区の精神的なよりどころとなっている。



写真5 善信寺 (2010年5月 藤永撮影)

写真左手前が共同納骨堂、真中が本堂、奥が住居。背後の山林の裏手に塚がある。

4. 小祠

鳥羽院下地区には、古くから観音や地藏など数多くの信仰対象地物が点在している。また、これらにまつわる伝説や言い伝えも多く、小集落ごと

に祭祀が行われるなどその信仰は篤い。

① 絹巻きの観音サン

古釜西の小集落の東側、県道273号を見下ろす崖上に観音像が祀られている(図2, 写真6・7)。この観音様は「絹巻きの観音サン」と呼ばれており、それは以下のような伝承に由来するという。



写真6 絹巻きの観音サンの堂

(1998年8月 藤永撮影)

県道273号線脇の急崖上にある。観音サンの堂の裏には、古釜西の集落が立地する。



写真7 絹巻きの観音サンの堂内

(1998年8月 藤永撮影)

この中で、古釜の住民が、後述する「お茶講」を開き、飲食をする。もともとあった観音像(人の背丈ほどあったという)は、大正期頃に盗難にあったという。

「むかし、この地に貧しい家があって、父母と1人の娘が住んでいた。娘の実母は早くに亡くなり、継母に養われていたのだが、継母は娘を大変邪険にしていた。ある日 継母は娘が織つ

ていた絹糸巻を背中に結び付けて家を追い出してしまった。娘があてもなく歩いているうちに日もどっぷり暮れてしまい、困り果てて周りを見渡すと松林の中に家を見つけた。その家を訪れると1人の女房が出てきて、娘の話の聞くとこれからここで暮らさないと優しく家へ招き入れた。それから娘は絹を織って暮らすようになり、いつの間にか数年の月日が経った。あるとき娘は父恋しさのあまりに家に帰りたくないと訴えると、女房は「わたくしは観音菩薩の化身で、あなたの母が生前観音菩薩を深く信心していました。わたくしがあなたをあわれんで育ててやったのも母の信心のたまものであるから、このことを忘れないで、今後父にも継母にも孝行を尽くしなさい。今からもなお、あなたの行く末を守ってやるから安心するがよい。」と、告げたかと思うとたちまち観音菩薩の姿となり、紫雲がたなびき異香ただよう中姿を消した。娘は驚き天を仰いで九拜し、それから自分の家に帰り着いた。長年たずね探しまわった娘が突然帰ってきたので父はすっかり驚いてしまった。娘は父母にそれまでの出来事を話すと父は観音菩薩のお恵みだと大いに喜んだ。

不思議なこともあるものだと、娘を連れて今まで娘が住んでいたというところを訪ねてみた。しかし、そこにはただ白絹が無数にひき張られ、継母がつけてやった巻板も数年前のまま立てかけられていた。父はいよいよ不思議に思うとともに有難さがこみあげ、白絹を押しただいて娘とともに帰ってきた。それからというもの、この家は非常に裕福な身上となった。しかし、継母は娘を憎んで追い出したのだから、父は継母に対して非常ないきどおりを覚え、責めなじった。娘は見兼ねて、父のたもとにすがり「わたくしは観音さまのお恵みによって命が助かりました。観音さまはわたくしが家に帰ったら親孝行をいたせ、そうしたならば、行く末お前を守ってやると仰せられました。今、母上を苦しめになることは観音さまのお言葉にもとつことであります」と諫めたので、父はなるほ

どと思って母を許してやった。それから継母はすっかり改心して娘をかわいがり、一家円満に暮らしていた」(脊振村史編さん委員会 1994)

この絹巻きの観音サンは、現在でも古釜の人々の信仰を集め、大切に祀られている。

②稗かゆのお地藏サン

大畑の集落の中ほどの道沿い、ムクロジの木の脇に小さな社がある(図2)。これは「稗かゆのお地藏サン」と呼ばれ、大畑の住民によって祀られている(写真8・9)。この地藏サンには、次のようないわれがある。



写真8 稗かゆのお地藏サンの廟

(1998年8月 藤永撮影)

写真右手のムクロジの木は、2005年の台風で倒れてしまった。



写真9 稗かゆのお地藏サン(1998年8月 藤永撮影)

「昔々、この山里に五、六人の供人を連れた、都人らしい旅人の一行がたどりついた。はるばると歩いてきたらしく旅の衣も色あせて旅のや

つれが見えた。一行は道端の野石に腰かけて何か話しあっていたが、一軒の小さな百姓家を見つけると、その家の表を訪れた。中をのぞくと薄暗い土間のすみで、一人の老婆が炉を焚いていた。何か煮物をしているらしく、大鍋の中からは、おいしそうなおいが漂っていた。供人の一人が、「われらは都からきた旅の者、はなはだ申し兼ねるが、食事の用意はできまいか」と言葉でいねいに頼んだ。老婆は都人らしい人々の口にあいそうな食事の用意など、できそうにないので、「あいにく、都の人にさしあげるような食べ物の用意はできません。あるものは杣人が食べる稗の粥ばかりでございます」と申し上げた。「何ものにも結構、あれにおられるのは都のさる高貴な方」と頼まれた。老婆は早速、稗粥を温めて差し上げたところ、一行は何杯もお代わりした。この一行は、隠岐島からひそかにこの地を訪れた後鳥羽上皇の一行であった。稗粥で身を温められた上皇は、

“かくばかり身のあたたまる草の名を
いかでか人は稗というらむ”

と歌を詠まれた」(脊振村史編さん委員会 1994)

稗かゆのお地藏サンの社の傍らには、後鳥羽上皇が詠んだとされるこの歌を刻んだ石碑が建立されている(写真10)。真偽のほどは別として、稗かゆのお地藏サンは、同小集落内の祭礼が行われる際には、供物が奉納され、日常でも、住民が通りすがりに手を合わせたり、掃除をするなど大畑



写真10 後鳥羽上皇が詠んだとされる歌が彫られた石碑(2009年1月 永野撮影)

の住民から篤い信仰を受けている。

③松平の阿弥陀サン

松平の集落の北東には、阿弥陀像が祀られている(図2, 写真11・12)。その由来は不明であるが、松平の住民によって、定期的に清掃が施され、祭礼の際には料理が供えられるなど、信仰の対象として、現在でも、大切に管理されている。

④八手の観音サン

佐古の南西に位置する観音様で、同小集落の住民によって祀られている(図2, 写真13・14)。住民を病災害から救う観音様として信仰され、現在でも供物が欠かされることはない。



写真11 松平の阿弥陀サンの廟
(1998年8月 藤永撮影)



写真12 松平の阿弥陀サン(1998年8月 藤永撮影)



写真13 八手の観音サンの廟
(2009年1月 永野撮影)



写真14 八手の観音サン (1998年8月 藤永撮影)
写真左手が八手の観音サン。この他にも佐古の小集落内にあった信仰地物が合祀されている。

⑤七郎明神

古釜, 佐古, 松平の小集落に祀られていた。「七郎明神」は, 家内安全, 交通安全, 五穀豊穡, 武運長久の神様であり, 鳥羽院下地区だけでなく, 東隣の鳥羽院上地区をはじめ, 筑紫山地内の周辺集落にも点在している。鳥羽院下地区に存在した3つの七郎明神は, 明治41(1908)年9月13日に, 後鳥羽神社に合祀された(脊振村公民館・服巻四郎編1958)。それぞれの存在は資料に記載されているものの, その正確な位置は不明である。



写真15 地王サンが祀られているイチヨウ
(1998年8月 藤永撮影)



写真16 地王サン (1998年8月 藤永撮影)

⑥地王サン

古釜東の中央, 県道273号のすぐ脇下, イチヨウの根元に, 「地王(じおう)サン」が祀られている(図2, 写真15・16)。由来は明確ではないが, 土地の守り神とされており, 地王サンの向かいに家を持つ住民によって管理されている。もともこの家は地王サンのすぐ脇にあったが, 昭和40年代の道路拡張工事の際に, 住宅を善信寺下に移した。正月には餅やお神酒を供え, 荒れてきたと感じたらその都度, 清掃をしている。ただし, 近年では, 地王サンの前にお供え物を置くと鳥が荒らすため, 代わりに自宅の床の間に供えているという。

⑦主観音

松平の東には, 「主観音(ぬしかんのん)」が祀られている(図2, 写真17)。主に主観音に最も近い住居を構える住民によって管理されており,



写真17 主観音 (2009年1月 永野撮影)
写真中央上が主観音, 右下の祭神は不明である。



写真18 九郎地蔵が祀られている木立
(2009年1月 永野撮影)

交通事故から守る観音様であるといわれているが、実際のところ、祭神は不明であり、その存在を知らない住民も多い。盆と正月と彼岸には、前述の家が、鳥に荒らされないよう自宅の床の間に花を供えている。

⑧九郎地蔵

佐古の北西、田中川の左岸の木立ちの中には、「九郎地蔵」が鎮座している(図2, 写真18・19)。「地蔵」と称されているが、正確な祀神は不明である。毎年12月に佐古の住民が九郎地蔵を参拝し、料理を供え、注連縄を新しく換えるなど信仰篤く祀っている。

⑨その他

佐古の南西に位置する「八手の観音サン」のさらに南西に、3つの石碑が並んで祀ってある(図2, 写真20)。明治時代にはこの場所に家屋があり僧侶が住んでいたという。秋には芸者を呼び、狂言を演じさせるなどして楽しんでいたという。現在では、主にこの土地を所有する佐古の住民によって管理されており、定期的に草を刈ったり、盆と正月には竹筒に花を入れて供えている。

この他、県道273号線と林道古釜線の分岐点付近の田中川の左岸に「ハマサン」と呼ばれる神が祀ってあったが、現在では竹林が残るのみとなっている(図2)。



写真19 九郎地蔵 (2008年12月 永野撮影)



写真20 八手の観音サンの上手に祀られている石碑 (2008年10月 永野撮影)

5. 墓地

鳥羽院下地区には、6つの墓地が点在していた。住居の裏山の高台など、いずれも居住域に近い山林域に存在した(図2, 写真21・22・23)。



写真21 古釜西に残る墓地跡の遠景

(2011年11月 藤永撮影)

墓地は円に示した丘の上にあった。写真右手の竹林の背後には、絹巻きの観音サンが祀っており、さらにその奥に古釜西の集落がある。



写真22 古釜の墓道 (2011年11月 藤永撮影)

写真21の墓地跡に続く墓道。普段、利用されることはないが、現在でも、草刈りを年に一度共同で行っている。

また、元脊振村立脊振小学校鳥羽院分校の東側には、第二次世界大戦における22人の戦没者の共同墓地が設けられている(図2, 写真24)。これは1958年12月、住民の土地の寄附により建立された。鳥羽院下地区のほぼ全戸に戦死者が存在し、盆と年末に遺族が墓地を清掃し、花と餅を供えている。



写真23 古釜西に残る墓地跡

(2011年11月 藤永撮影)



写真24 戦没者の共同墓地 (1998年8月 藤永撮影)

現在では、高齢化に伴い、急勾配の山腹に位置する墓地まで水や供え物の花を抱えて行くのは困難になり、墓地の手入れができないという住民が多くなった。昭和40年代に善信寺の納骨堂が建立されると、ちょうど土葬から火葬への移行時期と重なったこともあり、これを機に業者に依頼し、各墓地からお骨を掘り出し納骨堂に納める住民が増加した。その結果、ほぼすべての住民が善信寺、あるいは旧神埼郡内にある檀那寺の納骨堂に遺骨を納めるようになった。住民によっては、遺骨を掘り起こした後、墓石は土に埋め、その場所に八重桜を植えたというが、墓地へ足を運ぶこともなくなり、現在どのような状態になっているのかは分からないという。2009年現在、遺骨を納骨堂に納めていないのは、鳥羽院下地区では1戸のみで、その墓地は公民館の北の斜面に位置する(写真25)。以前は、6カ所存在した墓地のうち、今も

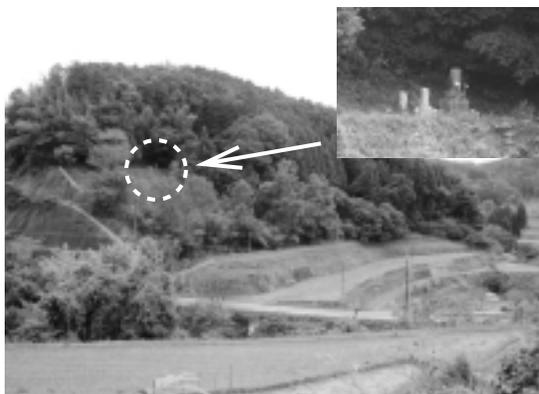


写真25 今も残る墓地 (2011年11月 藤永撮影)
円で示した個所に墓がある。写真左側に見える白いガードレールに沿って、簡易道が設置されている。かつての墓道は、墓地前面の水田の右奥から続いていた。



写真26 利用されなくなった墓道
(2011年11月 永野撮影)

写真25の墓地に続いていた。

機能しているのはここのみである。この墓地へは、佐古方面へと続く土橋付近から北へ伸びる墓道を使用していたが、昭和40年代に、古釜東と大畑の間の県道273号からその墓地へと登る簡易道が建設されると、元来の墓道は使用されなくなった。今も元の墓道は存在するものの草木に覆われ通行は不可能となっている(写真26)。

Ⅲ 鳥羽院下地区における祭礼行事

前章では、鳥羽院下地区における信仰を中心とした儀礼域の空間構成要素についてそれぞれ述べた。本章では、こうした儀礼の場において、どの

ような祭礼行事が行われ、それらがどのように変化してきたのか、という点について述べる。

1. 祭礼行事

鳥羽院下地区では様々な伝統的な祭礼行事が行われてきた。こうした祭礼では世主人が重要になる。世主人とは、祭礼の準備や飲食の会場として自宅を提供する者のことで、各小集落内で毎年各家が年番で役を負う。また、世主人は祭礼に出される酒や料理の仕入れ、さらには祭礼の料理に使用される米を生産する「マツリダ」³⁾の管理を任されるなど、祭礼における役割は大きい。しかしながら、現在では、農外就業者の増加と高齢化の中で、徐々に、こうした伝統的な祭礼行事も変化を余儀なくされている。

①お宮の祭

2月22日、5月7日、12月7日の年3回行われる。当日は、鳥羽院全体の鎮守である後鳥羽神社に、鳥羽院下地区および鳥羽院上地区の住民が参拝し、その後、世話人の家に集まり直会が開かれていた。現在では、参拝後の直会は公民館で行われるようになった。

②祇園祭

田植え後の7月22日に、後鳥羽神社で行われていた。後鳥羽神社の社では直会とともに、青年クラブ⁴⁾主催の演芸会が開かれた。青年クラブは、祇園祭の10日ほど前から準備を始め、即席の舞台で住民が踊りを披露したり、久留米などから雇ってきた芸人による手品、漫才、歌謡ショーなど盛大な余興を楽しんでいた。昭和20年代半ばには、電気などの設備の関係から開催場所を後鳥羽神社から鳥羽院分校へと変更した。その際、毎回青年クラブの構成員が後鳥羽神社から賽銭箱を分校へ運んで来ていた。このほか、鳥羽院分校では映画の上映も行っていた。鳥羽院分校が廃校となった現在でも、その跡地(鳥羽院山荘)において、祇園祭は開催されている。ただし、日時は、通勤兼業者の増加等により、7月22日に近い日曜日に変更となった。

③百手(モモチ)祭

「百手祭」は、田植え前の豊作を祈願する行事

で、4月17日に、古釜、大畑、松平、佐古の小集落ごとに行われていた。住民は後鳥羽神社に参拝し、神前に御神酒や塩サバ、その他の料理を供えた。用意される料理は、鳥羽院の山で採れたワラビやタケノコが主であり、ワラビご飯、ワラビのお汁、タケノコの煮しめ、イモンカン（サトイモの味噌煮）などであり、女性の住民が前日から世主人の家に集まって調理していた。参詣後、塩サバを境内で焼き、御神酒をさげ、一同でひと口ずつ飲む。続いて、「オウタイサンマン」が唱えられ、これが終わると、今度は供えていた料理をさげて食した。これらの行事が終了すると、世主人の家に集まり直会が開かれた。

また、古釜では、後鳥羽神社でのすべての行事が終了した後、境内で「鬼」と書いた紙を付けた的を射る行事があった。これはその年の豊穰を占う年占いで、矢が的に当たるとその年は豊作になるといわれている。的と弓矢は男性が昼間に集まり作る。弓は雑木に針金を張ったもので、矢は竹で作られる。的は竹の内側の皮を編みこんで作り、的の表には紙に墨で塗りつぶしの三日月を描いたものを、裏には鬼と書いた紙を張る。的に矢を射るのは、後鳥羽神社に参拝した男性と子どもである。なお、この的と弓矢は、後鳥羽神社に参拝する際、最初に御神酒や料理とともに、神前に供える習わしとなっている。

現在も百手祭は開催されているが、1950年頃に開催日時は、4月の第2日曜日に変更され、古釜では、開催場所が1997年より公民館に変わった。また、佐古では、人口減少と高齢化のため、外食をするようになり、事実上消失した。

④生立（オイタチ）祭

百手祭同様、田植え前に行われる祭礼であり、農繁期を迎えるにあたって、住民間の紐帯を確認する意味を持っていた。各小集落で世主人の家に集まり、2日間にわたって飲食していた。古釜の場合は東西に分かれて開催されていた。松平では、「サナボリ生立祭」と称し、田植え後も、その労をねぎらう意味で、世主人の家において直会が催された。また、青年クラブに属する若い住民

は、本来の生立祭をはさんで、七日間ほど青年クラブの宿泊所で連日飲食を行っていた。これは「青年生立祭」と呼ばれた。

生立祭は、その後、期間が短縮され、1994年からは5月の連休中の1日間となった。佐古では、2000年頃から旧富士町の古湯温泉などでの外食に変わったが、最近では、高齢化の進行により、こうした外出さえ難しくなっている。また、大畑では、通勤兼業者の時間的な制約や人口減少などにより生立祭は行われなくなった。さらに、松平で行われていたサナボリ生立は、1998年頃から、女性の台所仕事の負担を減らすために、前述の古湯温泉や呼子などへの旅行に取って代わった。ちなみに、青年生立祭も、1960年代頃に、青年クラブの消失とともに実施されなくなった。

⑤草木（ソウモク）祝い

9月の稲刈り前に、「草木祝い」が行われ、世主人の家に集まって飲食した。この行事も、生立祭と同様に、住民間の紐帯関係を確認する意味を持っており、古釜の場合は、東西に分かれて開催されていた。

第二次世界大戦後は、9月中の日曜日に行われるようになったが、現在では、各小集落すべてで消失した。ただし、11月に、鳥羽院下地区全体で公民館に集まって飲食するようになり、これが消失した草木祝いの代わりとして機能している。

⑥オマツリ

住民たちは、単に「オマツリ」と呼んでいるが、これは、米の実りと収穫を神に感謝する祭礼行事である。毎年、12月17日に行われていた⁵⁾。小集落ごとに後鳥羽神社へ参拝し、その後、年番の世主人の家に集まり直会が開かれた。時には、前日から集まって飲食することもあったという。以下に、具体的なオマツリの流れを示すが、4月の百手祭とほぼ同じ内容となっている。

まず、各小集落の女性が、前日から世主人の家に集まり、オマツリで供する料理を準備する⁶⁾。料理は各小集落で多少の違いがある。例えば、古釜の場合では、オロシバタ（大根おろしとほぐしたサバの身の酢の物）（写真27、28）、カケヤ（大



写真27 オロシバタ (2008年12月 永野撮影)



写真30 大根のなます (2008年12月 永野撮影)



写真28 オロシバタ用の大根おろし

(2008年11月 永野撮影)

オロシバタ用の大根は粗くおろす必要があるため、目の粗いおろしが使用される。



写真31 花大根とから炒りした大豆

(2008年12月 永野撮影)

花大根の上に大豆をのせて食べる。



写真29 カケヤ (2008年12月 永野撮影)



写真32 白菜とチクワの煮つけ

(2008年12月 永野撮影)

写真中央が白菜とチクワの煮つけ。右は大根のなますで、左はおつゆ。

根と人参の味噌和え)(写真29)大根のなます(写真30), 花大根(花型に切った大根)とから炒りした大豆(写真31), 白菜とチクワの煮つけ(写真32), イモンカン(サトイモの味噌煮)(写真33), シトギ(うるち米粉に水を加え練ったもの)(写真34), ゴクウサン(白飯)(写真35)であり, 大根を用いた料理が多いことに特徴がある。料理が完成すると, これらの料理と御神酒, 塩サバ(写真36)を持って, 後鳥羽神社に参拝し, 神前に供える(写真37)。境内の隅で数匹の塩サバを焼き(写真38), 社殿の中で食す料理に加える。このとき, 1匹は持ち帰り, 参拝できなかった住民が食すことになる。塩サバが焼けると, 神前の御神酒を下げ飲んで。その後, 年頭から年長3人が順番に「オウタイサンマン」を唱え, 料理をひと口ずつ食す。古釜では, この時, 男性が給仕する習わしで女性は一切手を出さない(写真39)。また,

イモンカンは一本の箸を使って食す決まりになっている(写真40)。後鳥羽神社の参拝が終わると, 世主人の家において後鳥羽神社に参拝できなかった住民も加わり, もう一度オウタイサンマンを詠み, 直会が開かれる。

ちなみに, 古釜ではこのオマツリの際, 後鳥羽神社の鳥居にかかる注連縄を, 新しいものに取り換える。古い注連縄は, 取り外した後, 鳥居前の杉木立の中に放棄する。新しい注連縄作りは, 祭礼当日に男性の住民が集まって行われる(写真41, 42)。注連縄の藁は, マツリダから調達されるもので, 世主人が用意する。注連縄づくりは, 家の梁に木を通してそこに藁をかけ, 掛け声とともに3人で縫り, 藁を継ぎ足しながら全長4ひろ半ほどになるまで縫る。縫る際に, 注連縄の端から目安として紐を添えて注連縄の中央を決め, 長さ太さを調節する。注連縄の端は縄を結え, こ



写真33 イモンカン (2008年12月 永野撮影)



写真35 ゴクウサン (2008年12月 永野撮影)



写真34 シトギ (2008年12月 藤永撮影)



写真36 後鳥羽神社に供える塩サバ
(2008年12月 藤永撮影)



写真37 後鳥羽神社に納められた供物

(2008年12月 藤永撮影)

写真左手にシトギ(上)と塩サバ(下), その隣に御神酒, 右手にイモンカンを入れた容器等が見える。中央には, 新しい注連縄(上)とゴクウサン等を入れたカゴ(下)が供えられている。



写真38 サバを焼く様子(2008年12月 永野撮影)

この時使用していた網は, イノシシ侵入防止用の柵を加工したものであった。



写真39 社殿の中で男性が御神酒をつぐ様子

(2008年12月 永野撮影)

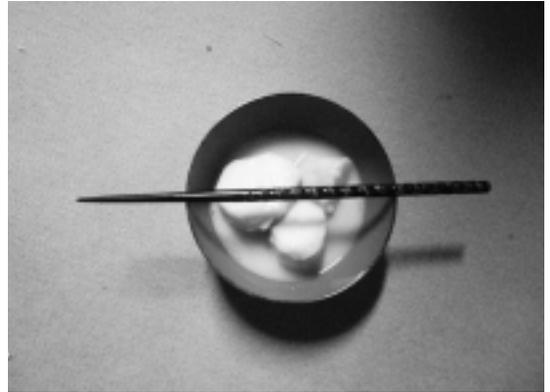


写真40 一本箸(2008年12月 永野撮影)

お碗の中身はイモンカン。



写真41 注連縄作りの様子①

(2008年12月 永野撮影)



写真42 注連縄作りの様子②

(2008年12月 永野撮影)

縫った注連縄からはみ出た藁を切り落としている。

れを持つ人は縄を体に巻きつけて固定する。注連縄づくりには、縫る（3人）、藁を渡す（4人）、縄の端を持って固定する（1人）、縫っている藁束を持ち固定する（1人）といった役割分担がなされる。縫い終わるとはみ出した藁をハサミで切り、中央に半紙でつくった紙垂を間隔をあけて2つ付けて完成する（写真43・44）。この注連縄は後鳥羽神社に参拝した際、前述のサバが焼けたころに取り付けられる（写真45）。

また、松平では、後鳥羽神社拝殿に張られた注連縄を交換する。

佐古の場合は、オマツリの際、後鳥羽神社に加えて、九郎地蔵へも参拝する。その時、魚、シトギ、イモンカン、ゴクウサン、2本の竹筒に入れたお神酒を供え、毎年、藁を細く縫った注連縄を九郎地蔵の周りに掛ける（写真46）。また、参拝後は、九郎地蔵が祀られている木立の葉を丸めて

盃をつくり、それにお神酒を注いで飲む、といった行事が行われる。

こうしたオマツリも、人口減少と高齢化、恒常的農外就業の浸透の中で、開催期日や場所、その内容が変化している。例えば、開催期日は、すべての小集落において、12月17日から12月の第2日曜日へと変更された。また、古釜では、世主人の家ではなく公民館において、料理や注連縄づくりを行い、直会が開かれるようになった。佐古では、オマツリの行事内容が簡略化され、後鳥羽神社や九郎地蔵に供える料理のうち、シトギとイモンカンを作らなくなった。2000年頃からは、世主人の家での直会を取りやめ、生立祭と同様に、古湯温泉などで外食をするようになった。さらに、現在



写真43 紙垂（2008年12月 永野撮影）
半紙に切り込みを入れて作る。



写真44 完成した注連縄（2008年12月 藤永撮影）



写真45 新しい注連縄と交換の様子
（2008年12月 永野撮影）



写真46 九郎地蔵の注連縄（2008年12月 永野撮影）
九郎地蔵が鎮座する木立に、約1.5cmの太さの注連縄が張られる。毎年、12月のオマツリの際に、佐古の住民によって新しいものに交換される。

では、今後、この外食もやめて、購入してきた料理を食べようという話も出ている。

加えて、佐古、松平、大畑の小集落では、マツリダでの米づくりを行わなくなり、祭礼の料理に使用される米は、世主人の家で生産されたものを用いるようになった。一方、古釜では、現在も年番でマツリダにおける米生産は続いているものの、イノシシの出没や水不足などにより、マツリダでの米づくりを行わない年も出始めた。そのため、現在は、古釜でも祭礼に使用される米が必ずしもマツリダの米とは限らなくなり、その場合も世主人が用意している。

⑦お茶講

古釜の住民によって行われる祭礼で、8月25日の夜8時頃から、絹巻きの観音サンが祀られていた古釜の青年クラブの宿泊所で開催されていた。個人で料理を持ち寄り飲食をする。この祭に参加すると、子どもが授かるという言い伝えもある。

1970年頃の県道の拡張工事によって、古釜の青年クラブの宿泊所は消失したが、新しく観音サンの堂が作られ、ここで現在でも毎年8月25日に近い土日を選んでお茶講が行われている(写真47)。



写真47 絹巻きの観音サンの堂でのお茶講の様子
(1998年8月 藤永撮影)

⑧金立(キンリュウ)サン祭

松平の住民により行われる祭礼で、毎年3月に当年と次年の世主人の2人が、集落の代表として金立神社(佐賀市金立町)に参拝し、米と金銭を奉納する。火除けの祭礼とされるが、実際には金立神社から五穀豊穡のお札を受ける。金立神社参

拝後、その年の世主人の家に松平の住民が集まり飲食する。この時、お札が配られる。また、供される料理は、セリの胡麻和え、大根とセリのなますの2品のみとなっている。

2. 善信寺の行事

鳥羽院下地区には、浄土真宗の善信寺が立地する。善信寺の門徒ではない住民も、同寺の行事に参加している。また、本山である西本願寺からの指示により仏教婦人会が組織されている。仏教婦人会は浄土真宗において催される様々な行事を手助け・支援する組織であり、女性門徒から構成されている。以下、善信寺にまつわる行事を見ていく。

①御正己報恩講

毎年、1月の終わり、もしくは2月初めの5日間に「御正己報恩講」が行われた。これは浄土真宗の開祖である親鸞聖人の命日の前後に営まれる法会である。この5日間の法会をとおして経があげられ、住民の中には法話を聞くため、本堂に泊まり込む人もあったという。法会の3、4日前には、仏教婦人会で餅つきをし、ついた餅を使って「お花束(けそく)」を作り、集落の男性らが、「お花束もり」といわれる本堂への飾り付けを行った。また、御正己報恩講の中日の夜には、毎年、年番で住民が集まり、経をあげ、お斎(精進料理)を食べた。加えて、仏教婦人会で小豆粥を作り、食べるのが習わしであった。

②松取講と竹ガラ取り

御正己報恩講の際には、同時に「松取講」が行われていた。松取講は、善信寺で使用する1年分の薪を採集するもので、主として古釜の住民によって行われた。各戸から1人ずつ労働力を出し、「オテンランヤマ」(善信寺所有の山林)から薪を採集して、善信寺の納骨堂の下に保存していた。松取講の際にもお斎が振舞われ、料理は、揚げ豆腐、なます、ご飯、おつゆと決まっていた。これに対して、大畑と松平では、御正己報恩講の前に、「竹ガラ取り」が行われていた。これも、善信寺に納める燃料の採集を目的としたもので

あった。

現在、5日間あった御正己報恩講は3日間に短縮され、中日に仏教婦人会で食べていた小豆粥も作らなくなった。また、ガスが普及するようになってくると、薪を使用する機会も減少していった。さらに松取講は、お斎の準備などに多くの時間を割かれるため、通勤兼業者にとっては負担になるようになった。そのため、1980年代半ばに門徒側からの要望により松取講は取りやめとなった。ほぼ同時期に、竹ガラ取りもなくなっている。

③永代経と虫供養

「永代経」は、6月に行われる先祖供養である。2日間に渡って、経を読み、法話を聴く。初日には仏教婦人会によってお斎の準備がなされ、振る舞われる。現在、永代経は、梅雨時の料理の腐敗を考慮して、11月に行われている。

また、永代経とあわせて、「虫供養」が行われていた。殺生した虫の供養として、善信寺にお参りしていたが、1980年代半ば以降、自然となくなってしまった。

④彼岸つとめ

春と秋の彼岸には、「彼岸つとめ」が行われ、門徒は善信寺に集い、鳥羽院下地区の内外から布教師を呼び、法話を聴いていた。

⑤五度米寄せ

「五度米(ごどまい)寄せ」とは、1年分の米を門徒が善信寺に寄進する行事である。この米は、寺の行事の際に振舞われるお斎に使用されたり、寺で食されたりする。ほとんどの門徒の家では米が生産されているが、米を生産していない家は金銭を納める決まりになっている。2003年頃に、農家数が減少してきたということで門徒の話し合いの末、米ではなく全員が金銭を米の代わりに寺に納めるようになった。寺側も1年分の米の管理に苦勞するため助かっているという。

⑥お茶摘み

「お茶摘み」は、寺で使用される1年分の茶を門徒中で摘み取る春の行事である。善信寺周辺には茶畑があった。しかしながら、1970年代半ば以降、通勤兼業者の増加と茶栽培の衰退により、お

茶摘みはなくなった。寺側にとっては、近隣住民から茶を頂くこともあり、お茶摘みが消失した後も困ることはないという。善信寺の茶畑の一部は駐車場となったものの、現在も寺前には茶が植えられており、お茶摘みが行われていた頃の名残がうかがえる。

⑦お講

毎月、善信寺では「お講」が行われ、住職の法話を聴く。これに参加するのは仏教婦人会の構成員であるが、鳥羽院下地区の他寺の女性門徒も参加するため、お講の参加者は鳥羽院下地区の婦人会に所属する女性とほぼ一致する。お講が終了したあと、仏教婦人会と婦人会の会合が開かれ、連絡事項の伝達が行われる。また、会合後には、小豆粥を食べることが習わしであった。

現在でもお講は毎月行われ、仏教婦人会と婦人会をあわせた会合も開催されるが、1998年頃からは、小豆粥を供さないようになった。これは、女性も仕事に就くようになり、小豆を炊く手間を掛けることが難しくなったためである。

IV おわりに

以上、本稿では、第1報に続き、脊振山地の集落、鳥羽院下地区を取り上げ、山のくらしとその変遷について報告した。これまで述べてきたように、鳥羽院下地区には、寺社だけでなく、さまざまな信仰対象物が存在し、それぞれが祭礼などの行事をとおして、住民たちと結び付き日常生活に深く根ざしていた。鳥羽院下地区と同上地区をあわせた鳥羽院全体で行う祭礼行事から、古釜や大畑、松平、佐古の各小集落で行うものまで、社会的階層性を有する多様なものであった。また、これら各種の祭礼に関する行事は、鳥羽院下地区を取り巻く自然環境に依拠した生業や生活にもとづいており、ムラ人と環境とのかかわりを端的に示すと同時に、彼ら彼女らのムラのくらしの安寧を願う切実な想いの表れとも解釈できる。

その一方で、高度経済成長期を境に、山のくらしのあり方も変化していくことになる。兼業化や

恒常的な農外就業の浸透、離農、若年層の住民の流出、人口減少と高齢化など、時代の波に揉まれながら、鳥羽院下地区の人々は、そのくらしの形を柔軟に変容させ、時には頑なに変化することを拒否しながら、山のムラを守ってきた⁷⁾。今回報告した信仰や祭礼行事にもそのことは表れている。今後も、こうした山のくらしの変容は続き、失われる地域文化も増えてくるであろう。だからといって、われわれのノスタルジックな想いから鳥羽院下地区の人々のくらしを昔のように戻すことはできないし、そうした権利もない。しかしながら、だからこそ、地道ではあるが(少しその歩みを速めつつ)、“山のくらし”の記録を可能な限り前へ進めていきたいと考えている。

謝 辞

本稿を作成するにあたり、佐賀県神崎市脊振町鳥羽院下地区の住民の皆様に、多大なるご協力を賜りました。ここに、記して厚く御礼申し上げます。

なお、本稿は、平成20年度に佐賀大学文化教育学部に提出した卒業論文(永野真歩著・藤永 豪指導)の一部に、藤永による1998年3月から1999年2月までの現地調査とその後の追加調査の成果を加え、大幅に修正したものである。

注

- 1) 浄土真宗本願寺派(西本願寺)では、全国の寺院を32の教区に分け、さらに、教区の中を地域ごとに533の組(そ)に区分している。
- 2) 鳥羽院下地区の住民が、門徒として所属するのは、主に旧神埼郡神埼町(現神崎市神埼町)の信心寺および旧神埼郡千代田町(現神崎市千代田町)の西真寺である。
- 3) マツリダは、小集落毎に所有・管理していた。聞き取りによれば、1950年頃、古釜・大畑・佐古はそれぞれ1カ所ずつ、松平が2ヶ所のマツリダを有していたが(図2)、現在では、古釜のみが生産を続けている。
- 4) 青年クラブは、「若者組」、「若連中」と呼ばれる未婚男性の地縁的組織である。鳥羽院下地区では、1960年代初期まで存在した。小集落ごとに宿泊所があり、結婚して青年クラブを抜けるまで寝泊りしていた。詳しくは、別稿で紹介したい。
- 5) ただし、年代は不明であるが、かつては1月に行われていたという。
- 6) プロパンガスが普及する以前、世主人が料理の準備をする際のタキモン(燃料)として、各戸が所有する山林から、竹ガラ(枯れた真竹など)を採集し、提供していた。
- 7) 藤永(1999)は、鳥羽院下地区だけでなく、隣接する鳥羽院上地区も含めた住民の就業変化と社会組織や祭礼行事とのかかわりについて調査している。

参考文献

- 脊振村公民館・服巻四郎編(1958):『脊振村誌』脊振村役場。
- 脊振村史編さん委員会(1994):『脊振村史』脊振村教育委員会。
- 永野真歩・藤永 豪(2010):脊振山地の民俗誌(1) 高度経済成長期までの山のくらし・定住と生産の場を中心に . 佐賀大学文化教育学部研究論文集,14(2),281-299 .
- 藤永 豪(1999):都市近郊山村における住民の就業変化と村落社会-佐賀県脊振村鳥羽院を事例として. 地域調査報告,21,39-50 .
- 藤永 豪(2000):都市近郊山村における地名からみた住民の空間認識 佐賀県脊振村鳥羽院下地区を事例として . 地理学評論,73A,578-601 .
- 松崎憲三(1983):村落の空間論的把握に関する事例的研究 千葉県海上町倉橋を試例として . 国立歴史民俗博物館研究報告,2,1-39 .